



「良くも悪くも付き合いが続く、 世の中の陰と陽」

ちょっと聞いてよ

JA西日本くみあい飼料株式会社広島営業所 獣医師 中尾 継幸(なかお つぐゆき)氏

物事には「長所と短所」、「苦と楽」など二つの相対する局面があります。この考え方は東洋の信仰思想で「陰陽説」と呼ばれます。森羅万象を表すこの陰陽説では、全ての事象は「陰」と「陽」に二分され、「陰」は受動、暗、沈静、解放など、「陽」はその真逆の事象として能動、明、攻撃、興奮などの性質を持ちます。そして両者に優劣は無く、異なる役割を持つ対極のもの同士が助け合っという思考が陰陽説の概念です。

酪農においても頻繁に耳にする『陰と陽』があります。乳房炎の原因菌であるグラム陰性菌とグラム陽性菌です。この陽性と陰性の違いは、細菌検査での染色法にて青色に染まるか否かで区分するもので、当然ながらそこに思想的な意味はありません。

しかし、この乳房炎での「陰と陽」はどちらもが排除されるべき悪の対象です。しかも東洋思想の陰と陽では両者に優劣はありませんが、乳房



炎での陰と陽では「陰」の方が、より悪の本性を曝け出します。グラム陰性菌は細菌の外膜に内毒素を含むため、大腸菌などのグラム陰性菌性乳房炎ではその毒素が循環系に侵入してしまい、牛がショック死することもあるのです。

また、生産性についてもグラム陰性菌性乳房炎は顕著に悪影響を与えます。乳房炎に罹患すると乳量が低下しますが、ある調査において、罹患後五十日間での泌乳量は正常牛対比でグラム陽性菌性が百二十七kgに

対し陰性菌性では三百三kgもの減少が認められました。さらに乳房炎は繁殖成績も悪化させます。授精後一週間以内に乳房炎を発症すると、その授精での受胎率が低下するという報告があり、しかもグラム陽性菌性では四十七%の低下に対し陰性菌性では実に八十%も低下するというの

です。このようにグラム陰性菌性の乳房炎は乳量減少や繁殖成績の悪化、淘汰牛の増加など、乳牛の生産性を妨げる極めて忌々しき事象です。

一方、グラム陽性菌性乳房炎は陰性菌性に比べ、牛体への直接的危害はあまり大きくないものの、黄色ブドウ球菌のように牛群の体細胞数を上昇させ、難治性で他の牛に伝染する菌もあり、酪農経営において陰性菌同様に厄介な事象であることには違いありません。

乳房炎における『陰と陽』と東洋思想でのそれとの間には共通点があります。それは現状が陰・陽のどちらに傾きつつあるのかを把握することの重要性です。陰陽説では人間は陰と陽のどちらにも傾き過ぎることなく常なる修正を求められるそうですが、乳房炎についても、農場におけるグラム陰性菌性・陽性菌性の発生傾向を知ること、環境や搾乳衛生など改善点が明確になり的確な修正ができます。「陰と陽」は人間が何かを行う上で一生付き合わなければならない存在だそう、それは酪農でも同じ事なのかもしれません。